

第1コリント書1-4章の修辞学的分析

—神学議論としてのアイロニー(2)*—

山田 耕太

1. 第1コリント書1-4章の修辞学的分析

手紙の前書きを除いた本体の「弁明」の議論は以下のように「配列」されている⁽¹⁾。

- (1) 序論：感謝の祈り(1:4-9)
- (2) 陳述：分派の問題(1:10-17)
- (3) パラドックスによる論証：「十字架の言葉」の「愚かさ」と「賢さ」(1:18-2:5)
- (4) 比較による論証：「神の知恵」と「人間の知恵」(2:6-3:4)
- (5) 比喩による論証：パウロとアポロ(3:5-4:5)
- (6) アイロニーによる反駁：「愚かな」「賢さ」(4:6-13)
- (7) 結論：「私に倣う者」(4:14-21)

(1) 序論：感謝の祈り(1:4-9)

パウロの手紙の導入部である「感謝の祈り」は、修辞学的議論の「序論」(prooimion, exordium)⁽²⁾にあたる。そこでは聴衆や読者の行為などを称賛することによって感情に訴えて「好意」を抱かせ(captatio benevolentiae)、「注目」させ、議論を「受け入れ」る準備をさせる。⁽³⁾

パウロは巧みに「並置」(pariosis)⁽⁴⁾、「対置」(antithesis)⁽⁵⁾、文末の語句を繰り返す「語尾音反復」(homoioteleuton)⁽⁶⁾などの文彩に富んだ表現で神への感謝の祈りをささげる。そこではコリント人が「言葉」⁽⁷⁾と「知識」に富んでおり、キリストの証言が彼らの中で確証され、彼らが霊の賜物に欠けるとことがないと称賛する(1:5-6)。ここでの「知識」はグノーシスの問題と結びついているのではない。⁽⁸⁾ ベッツが指摘するように1-2章の「知恵の言葉」の問題と結びついているのでもない。⁽⁹⁾ そこには「知識」という言葉が一回も出てこないからである。

しかし「すべてにおいてあなたがたは富んでいる(eploutisthete)」(1:5)という称賛の言葉には「既にあなたがたは金持ちになっている(eploutisthete)」(4:8)という非難の言葉が重ねられ、「すべての言葉とす

べての知識において(富んでいる)(1:5)という表現には1-2章の「知恵の言葉」(2:1, 4, 13, 4:20, cf. 1:17)の問題と「偶像への供え物」(8:1, 7, 10, 11)や「靈的賜物」の問題が暗示される(13:2, 8, 14:6)。また、「靈的賜物において何一つ欠けるとことがない」(1:7)という称賛の言葉には、12-14章の靈的賜物を巡る問題が前もって提示されている。ここでは、ウィンターが主張するように、パウロがソフィストの論敵にさらされて、ソフィストに劣る「地位」のコリント人を励ます言葉が述べられているのではない。⁽¹⁰⁾ コリント人を称賛しつつ、これから論じる問題がほのめかされ、それと同時に称賛とは反対にコリント人を暗に非難する「アイロニー」(eironeia)が述べられているのである。⁽¹¹⁾

(2) 陳述：分派の問題(1:10-17)

修辞学的議論では争点になっている経緯を前もって簡潔に述べる「陳述」(diegesis; narratio)⁽¹²⁾が「序論」に続く。⁽¹³⁾ 議論の争点には時間と人物を限定しない非限定的な問題(thesis)と時間と人物を限定する特定のな問題(hypothesis)がある。⁽¹⁴⁾ ここで問題になっているのはキリスト教の教義についての一般的・包括的な問題ではなく、コリントの共同体の危機的な状況という時間と人物を限定する個別的・特定のな問題である。しかし、パウロは特定の個別的な問題を包括的・一般的に議論してから、個別的・特定のな議論に移る傾向がある。⁽¹⁵⁾

第一に、パウロは、他の手紙でも助言している共同体の「一致」(1:10, cf. フィリピ 1:27, 2:2, 4:2)を勧める。⁽¹⁶⁾ それはコリントの場合は他の共同体には見られないキリスト教の宣教者に由来する「分派」(schismata)ないしは「争い」(erides)という深刻な問題が起こっているからである(1:10-12)。この問題を叙述する際に、パウロは「並置」⁽¹⁷⁾「対置」⁽¹⁸⁾「語尾音反復」(homoioteleuton)⁽¹⁹⁾の他に、「頭語畳用」(epanaphora, anaphora)⁽²⁰⁾「隔語反復」(prosapodosis, epanadiprosis)⁽²¹⁾などを用いて状況が深刻であることを強調する。

「分派」が起こった背景について、「キリストが引き裂かれたのか」「パウロが十字架にかかったのか」「パウロの名によって洗礼を受けたのか」(1:13)と三つの修辞的疑問で畳み掛ける。しかし、次第に調子を高める「キリスト(のからだ)」⁽²²⁾「十字架」「洗礼」についての修辞的疑問で最後の問いは、パウロが直面したコリントの分派の現実の一端を現している。「洗礼」については、直後の14-17節のコメントでさまざまな文彩を用いて動詞が5回も繰り返されるが、「パウロの名による洗礼」が2回繰り返し言及され(

1 :13, 15)、分派を起こしている一派がパウロの名による洗礼を授けていたことを想定させる。

この「洗礼」について詳細は不明であるが、「パウロの名による洗礼」であるので、神秘的な密儀教の「洗礼」ではなく、パウロに倣うという意味ではあるのだが（パウロ派？「パウロの弟子」使徒 9 :25、参照）、ウィンターが想定するようにソフィストの信奉者がソフィストの教師を偶像崇拜的に倣うことでもない。⁽²³⁾ もしそうであるならば、パウロはソフィストの信奉者（アポロ派？）以上にソフィストの教師としてソフィストでなければならないが、それはパウロ自身の言明に反するからである（1 :17, 2 :1, 4-5, 13）。「キリスト（のからだ）」への参与を象徴する「十字架」「洗礼」の「修辭的疑問」には、「キリスト」と「パウロ」を対置的に入れ替えて、強い否定の感情と同時に、ここにも強い「アイロニー」が見られる。だが、パウロはこれらを否定して、派遣された使命が「洗礼を授ける」ことにあるのではなく、それ以前の段階の「宣教する」ことにあることを強調する（1 :17a）。他方、宣教にも二種類あり、それは「言葉の知恵」すなわち「修辭学的技巧」⁽²⁴⁾ による宣教ではなく、「キリストの十字架」を語る宣教であることを強調する（1 :17b）。二種類の宣教の問題は18節以下で詳細に展開される。

(3) 「パラドックス」による論証：「十字架の言葉」の「愚かさ」と「賢さ」（1 :18-2 :5）

修辭学的議論では、通常では自分の立場の正しさ主張する「論証」（*pistis, kataskeue; argumentatio, confirmatio*）が「陳述」に続く。⁽²⁵⁾ パウロは最初に包括的な一般論を述べ（1 :18-25）、それにコリントに特定の個別的な具体論を続ける（1 :26-2 :5）。

第一に、パウロはここで「十字架の言葉」について、17節の末尾の語句を18節の文頭で繰り返して「前辞反復」（*anadiplosis*）⁽²⁶⁾ という手法で導入し、「十字架の神学」の議論を展開する。それは「十字架の言葉は愚かである」（1 :18, cf. 1 :21, 23, 4 :10）という非難に対する弁明である。宣教対象を「滅びに至る者」と「救いに至る者」に二分して「対置」的構文に置き換え、「愚かさ」とは反対に「神の力」を対比させる（1 :18）。また、この主張を理由づける文書の「証拠」（*semeion; argumentum*）⁽²⁷⁾ として「並置」的構文の旧約聖書（イザヤ書29:14LXX）を引用する（1 :19）。以下では、この時間や特定の人物や問題に制限されない「命題」（*thesis; propositio*）⁽²⁸⁾ を展開する。

第二に、「愚かさ」と「神の力」（すなわち「賢さ」）という二律背反の宣

教内容から「愚かな者」と対比的な「賢い者」という宣教対象に視点を移す。その際に、「語頭畳用」を用いて「賢い者はどこに(pou)いる、知者はどこに(pou)いる、この世の論争好きはどこに(pou)いる」と勢いよく修辭的疑問を畳み掛ける。その上に「神はこの世の賢さを愚かにしたのではないか」と先の旧約聖書の引用句を「パラフレーズ」(paraphrasis)⁽²⁹⁾して、修辭的疑問で問い質す(1:20)。

第三に、「宣教の愚かさ」について弁明する。すなわち「人間の知恵」では「神の知恵」に到達できないので、神が宣教の「愚かさ」によって人間を救おうとされた「神の知恵」を「人間の知恵」と「対置」する(1:21)。⁽³⁰⁾また、宣教対象である「ユダヤ人」と「ギリシア人」はそれぞれ「しるし」と「知恵」を求め、それに到達できず、前者には「つまづき」で後者には「愚か」と「並置」的表現で語る(1:22-23)。だが、十字架の宣教の言葉は救われる者には「神の力」であり、「神の知恵」として「対置」的表現を重ねる(1:24)。その理由として、「神の愚かさは人間の賢さよりも賢く、神の弱さは人間の弱さよりも強い」と正反対に対立する概念を統一的に表現する「オキシモロン」(oxymoron)⁽³¹⁾を用いて表現する(1:25)。

第四に、宣教内容と宣教対象について的一般論からコリントの共同体の問題に目を転じる(1:26, blepete)。⁽³²⁾「人間的に見て賢い者は多くなく(ou polloi)、力ある者も多くはなく(ou polloi)、よい家柄の者も多くはない(ou polloi)」と20節に対応して、ここでも「語頭畳用」を用いて「賢い者」が多くないことを主張する。また、「神がこの世の…を選ばれたのは…のためである」と脚韻の「押韻」(paramoiosis)⁽³³⁾を三度繰り返して、救われるのは、取るに足りない者であることを強調する(1:27-28)。さらに議論を締めくくるにあたり、パウロは旧約聖書の言葉(エレミヤ書9:24)を引用して、「知恵の言葉」を持つ人々が誇ることがないようにと警告する(1:29-31)。

第五に、宣教の対象であるコリント人の問題から宣教者である自分自身の問題に議論を転じ(2:1, K'ago)、⁽³⁴⁾コリント宣教について弁明的な告白をする。すなわち、パウロの「十字架の言葉」は「知恵の言葉」と極めて対照的で「優れた言葉や知恵によるのではなく」(2:1)、「説得的な知恵の言葉によるのではなく、霊と力の頭れによるのであった」(2:4)。それは「人間(から)の知恵」ではなく、「神の力」によるためであると「対置」的に表現する(2:5)。

このような修辭学的議論で一貫しているのは、既に多くの研究者や注釈者が指摘しているように「パラドックス」である。⁽³⁵⁾それは「十字架の言葉

は愚かである」という相手の受け入れる前提から出発して、宣教の愚かさによって救われる者には「神の力である」という予想外の逆の結論に導く「パラドックス」⁽³⁶⁾である。また、賢い者、力ある者、地位ある者に恥を書かせるために神は無に等しい者を選んだ、という「パラドックス」である。シュミットが主張するように称賛と非難の調子が全体に見られるわけではないので、一見すると悪いものや恥ずかしいものをよく称賛する「逆説的な称賛」(paradoxon encomion)⁽³⁷⁾ではない。

(4) 「比較」による論証：「神の知恵」と「人間の知恵」(2:6-3:4)

ある注解者や研究者は、⁽³⁸⁾この箇所を議論の「逸脱」(digressio)⁽³⁹⁾と理解するが、逸脱ではなく論証の第二の展開である。ここでも包括的な一般論(2:6-16)の後に、コリント特定の個別的な具体論(3:1-4)に入る。

第一に、パウロはコリントで「十字架の言葉」しか語らなかった(2:2)という第一の議論とは対比的に、「知恵(の言葉)を語る」ことを「語頭疊用」⁽⁴⁰⁾を用いて強調する(2:6-7)。これはパウロが「知恵の言葉」を語らない(2:6, cf. 2:1, 4-5, 13)という非難に対する弁明である。ただし、パウロはそこに「幼な子」(3:1)と「対置」した「成熟した人の間で」と限定をつける(2:6 a)。また「語頭疊用」を用いて「知恵」には二種類あることを表明し、それが「この世の」知恵ではなく、啓示された「神の」知恵であることを「対置」的表現を用いて鮮明に対立させる(2:6 b-7 a)。神の隠された知恵とは、この世の(aionon)初めから栄光(doxan)のために「神」が定めたものであり、この世の(aionos)「支配者」が知らなかった(egnoken)ことであり、もし知って(egnosan)いれば、栄光(doxes)の「主」を十字架につけなかったはずである、と「神」「支配者」「主」を巡る出来事を「対置」的構文で表現する(2:7 b-8)。その上、この主張を裏付ける文書の「証拠」として「対置」的表現と「並置」的表現による旧約聖書(イザヤ書64:3)を引用する(2:9)。

第二に、対立する二つの「知恵の言葉」の存在の問題から、その認識の問題に議論を転じ、「前辞反復」の手法を用いて、それが「霊」によることを強調する(2:10)。「人間の中で誰が人間のことを知るのか、人間の内にいる霊以外に」と「人間」という言葉の「繰り返し」(palilogia, anadiplosis)⁽⁴¹⁾による「修辭的疑問」で強調し、それに「神のことは神の霊以外に知ることができない」という「対置」的構文を続ける(2:11)。ここでは「同様に」(2:11b)という言葉を用いて「類比」(analogia)⁽⁴²⁾の論理が見られる。そして、パウロやコリント人が受け継いだのは、「この世の霊」ではなく「神か

らの霊」であることを「対置」的構文を用いて対立を明確にする（2:12）。

第三に、冒頭の「私たちは語る」（2:6）という問題に戻ってその方法に議論を転じ、対立的な語り方の「人間的な知恵の教えの言葉による」のではなく「霊の教えによる」よることを「対置」的表現で明確に示す（2:13a）。また、その対象である「霊の人」と「肉の人」とを対比し「霊の人」と「肉の人」の関心の対象がまったく異なることが、「霊」とその類似語ならびに「判断する」とその類似語の「繰り返し」（anadiplosis）⁽⁴³⁾により表現する（2:13b-15）。この一般論の結びには、「霊」の代わりに「思惟」と置き換えた旧約聖書（イザヤ書40:13LXX）を書かれた言葉の「証拠」として引用する（2:16）。

第四に、以上の一般論からパウロとコリント人の現実問題に議論を収束させ（3:1, K'lago）、⁽⁴⁴⁾パウロがコリント人の間で以上のように議論してきた「神の知恵の言葉」を語れなかった理由を述べる。それは「霊の人に対するように(hos)ではなく、肉の人に対するように(hos)、キリストにある幼な子に対するように(hos)」語ったからであると「語頭畳用」で強調して印象づける（3:1）。また、「成熟した人」（2:6）と対比的な「幼な子」を用いて議論を冒頭に戻す。さらに、「乳」を与えて養育したのであり「硬い食物」ではなかった、と「隔語反復」の表現を用い、「（硬い食物を食することが）かつてでもできなかったし、今なおできない」と「並置」して、コリント人が霊の人でないことを強調する（3:2）。さらに、「妬み」や「争い」（cf. 1:11）があり、「人間的な基準で歩んでいる」のであれば「肉の人ではないか」と「並置」的な修辭的疑問を重ねてさらに畳み掛ける（3:3）。結びに、「私はパウロにつく、私はアポロにつく」（cf. 1:12）というコリント人自身の言葉を逆説的に「証言」として用いるが、ここにも「アイロニー」が見られる。そして、その「証言」に基づいて、コリント人は霊の人ではなく「（肉の）人間ではないか」と「修辭的疑問」を投げかける（3:4）。

以上のような「知恵の言葉を語る」というテーマの修辭学的議論で一貫する方法は何か。ここでは、隠された神秘である「神の知恵」が称えられている点も見られるが（2:6-7）、それと同時に「この世の知恵」が対比的に描かれており、この議論を貫いているのは「名譽の稱賛」（enkomion endoxon）⁽⁴⁵⁾ではない。「神の知恵」と「この世の知恵」の対比ばかりでなく、「神の霊」と「この世の霊」、「霊の教え」と「人間的な知恵の教え」、「霊の人」と「肉の人」が対比的に「比較」⁽⁴⁶⁾されているのである。それは「肉の人」であるコリント人を非難するためである。また、このような「比較」の中で、神と人間の霊の働きを述べる際には「類比」という方法も用い

られている。

(5) 「比喩」による論証：パウロとアポロ（3:5-4:5）

「十字架の言葉」が愚かでないこと（1:18-2:5）、コリントでは「知恵の言葉」を語らなかったこと（2:6-3:4）が弁明されてきた。それに引き続いて、パウロはコリントの問題の核心である「パウロとアポロ」について、「比喩」⁽⁴⁷⁾（3:5-9, 3:10-19, 4:1-2）を用いて弁明する。

第一に、「アポロとは何か(ti oun estin)、パウロとは何か(ti de estin)」という「語頭畳用」を用いた「対置」的な修辭的疑問から議論を始める（3:5）。最初にギリシアの太陽神・農業神「アポロ」と関連して「農夫」（3:9）の「隱喩」(metaphora; translatio)⁽⁴⁸⁾を用いる。「私が種蒔き、アポロが水撒き、だが神が育てた」と類似の三語句で調子を高める「トリコーロン」(trikolon)⁽⁴⁹⁾を用いて、「仕える者」（3:5）で「同労者」（3:9）である彼らの役割の違いを印象的に表現する（3:6）。また、その中で神の役割を強調し（3:7, ou... ou... alla）、「並置」的構文を用いて、両者の働きは一つであるが、その報酬は働きに応じることを述べる（3:8）。⁽⁵⁰⁾そして、「神の(theou) 同労者、神の(theou) 農夫、神の(theou) 建築家」という「語頭畳用」を用い「神の」を強調して、次の比喩に移る（3:9）。

第二に、ユダヤ人の「大工」（マルコ 6:3, tekton）イエスと関連して「大工の棟梁」(archtektion)を「隱喩」に用い、パウロが「賢い」棟梁として「土台を据え」、⁽⁶¹⁾アポロ(cf. allos)がその上に家を建てたと両者の関係を語る（3:10）。そして、土台であるキリストを強調した後に（3:11）、「金」「銀」「宝石」「木」「草」「藁」と「接統詞省略」(asyndeton)⁽⁵²⁾を用いて、象徴的な建物の違いにより「業」の違いを強調する（3:12）。さらに、二組の「語頭畳用」の構文を用いて、⁽⁵³⁾火に象徴される終末時の審判の前で、⁽⁵⁴⁾コリントの分派の原因である共同体の各自の「業」が問われていることを強調する（3:13-15）。

第三に、以上の一般的な議論から個別的なコリント人という各論に議論を転じ、「コリント人のからだ」こそ、建物の中でも重要で「キリストのからだ」を象徴する神の「霊」を宿す「神殿」であると展開する（3:16）。また、「前辞反復」の構文で「破壊する」という動詞を繰り返して、コリント人自身が「キリストのからだ」を「破壊している」ことを強調する（3:17）。尚、この問題は具体論として5-6（7）章で展開される。

第四に、1:18から続けられてきた「賢い者」と「愚か者」の「論証」の実質的な「結論」⁽⁵⁵⁾が、比喩の間に「逸脱」(digressio)として差し込まれ

る。それは「誰も自分自身に欺かれないように」という警句とともに「対置」的構文で述べられる。すなわち、「もしあなたがたの内で誰かがこの世の中の基準で賢いと思うならば、愚かになりなさい。それは賢くなるためである」という極めて「パラドックス」に満ちた結論である（3:18）。この根拠として、第一の議論の結論である「この世の知恵は神にとっては愚かだからである」（cf. 1:19, 20b, 25）という「パラドックス」が繰り返される（3:19）。そして、この結論を裏付けるために書かれた「証拠」として旧約聖書の語句（ヨブ 5:13、詩編93:11LXX）を引用する（3:19-20）。また、実践的な結論として「誰も人間的な基準で誇らないためである」（3:21a）が追加される。その理由として「トリコーロン」を繰り返し「パウロであれ（eite）、アポロであれ（eite）、ケファであれ（eite）」「この世であれ（eite）、命であれ（eite）、死であれ（eite）」「今あるものであれ（eite）、来るべきものであれ（eite）」（3:22abc）と述べ、「隔語反復」で文の初めと終わりに「すべてはあなたがたのものである」を繰り返す（3:21b, 22d）。その上、「すべてはあなたがたのもの、あなたがたはキリストのもの、キリストは神のもの」（3:23）と「漸増法」（*klimax*）⁽⁵⁶⁾により称賛の頂点に達する。

第五に、再びコリント人の個別的な具体論に議論を戻し、パウロとアポロの役割を説明するもう一つの比喩を追加する。今度は「キリストの召使（*hyperetas*）で神の神秘の家令（*oikonomos*）のように」という「直喩」（*eikasia, eikon; simile*）⁽⁵⁷⁾で語られる（4:1-2）。ここでも「神」と「キリスト」ばかりでなく、家に「仕える者」（3:5, *diakonos*）で一番身分の高い「家令」と一番身分が低い「召使」が「対置」されている。しかし、パウロは「判断する」「吟味する」「義とする」「裁く」という同義語を重ねた「並置」的文章で、「仕える者」に求められる業の評価は自分で判断せず、最終的には人間ではなく神の評価に委ねていることを告白し、コリント人にもこの地上で裁くのではなく、終末時に審判を下す神に委ねることを勧める（4:3-5, cf. 3:13-15）。

このような修辞学的議論を支配しているのは、「二律背反の称賛」（*enkomion amphidoxon*）⁽⁵⁸⁾ではなく、二つの「隠喩」と二つの「直喩」による「比喩」である。パウロとアポロは「比較」されるべきところであるが、あえて両者の優劣や違いを明確にする「比較」を用いずに、共通の類似点を強調するために「比喩」を用いる。「比喩」を用いることによって、パウロとアポロの宣教者としての使命の同一性を強調した上で、役割の違いを弁明する。

(6) 「アイロニー」による「反駁」：「愚かな」「賢さ」(4:6-13)

修辞学的議論では、しばしば自分の主張の「論証」の後に、相手の主張の「反駁」(anaskeue; refutatio, reprehensio)⁽⁵⁹⁾ 続く。パウロは以上の議論を打ち切って(4:6, tauta de)、自分たちは「賢い、強い、称賛される」(4:10)と高慢になっている相手の立場を「反駁」⁽⁶⁰⁾ する。

第一に、パウロ自身とアポロを「喩えた」⁽⁶¹⁾ のは「高ぶらないためである」と分派の実際的な問題に移る(4:6)。「誰が(tis)あなたを裁判官にするのか。受けた(elabes)ものでない何か(ti)を持っているか。もし受けた(elabes)のであれば、なぜ(ti)受けた(labon)のでないかのように誇るのか」と「語頭畳用」と「語尾音反復」を組み合わせた三つの修辞的疑問でコリント人の「誇り」を強く非難する(4:7)。同様に、「語頭畳用」と「語尾音反復」の文「既に(ede)あなたがたは満腹している(este)、既に(ede)あなたがたは金持ちになっている(...sate)」と「王様になっている」を三回繰り返した「語尾音反復」でコリント人の高慢さを強調する(4:8)。

第二に、以上のように過度に誇張されたコリント人の描写(4:8)とは極めて対照的に、また「神殿」に喩えられたコリント人(3:16-17)とは極めて対照的に、使徒パウロの立場は、天上と地上の間で「この世と天使と人間」が観客となってドラマを見る「劇場になっている」(直訳。意識、剣闘士のような「見世物になっている」という「隠喩」と「死に定められた囚人のようだ」と「直喩」を用いて「アイロニー」を語る(4:9)。そこでは、「私たちは(hemeis)愚かだが、あなたがたは(hymeis de)賢い。私たちは(hemeis)弱い、あなたがたは(hymeis de)強い。あなたがたは(hymeis)称賛されるが、私たちは(hemeis de)軽蔑される」と三組の「オキシモロン」を用いて、「アイロニー」を込めてコリント人を非難する(4:10)。さらに、「餓え、乾き、裸で、懲らしめられ、家がない」⁽⁶²⁾ 状態で「自分の手で働いて苦労している」と「弱く」「貧しい」状態を描写する(4:11-12a)。それにもかかわらず、さらに三組の「対置」的構文の「トリコーロン」を用いて、「悪口を言われても祝福し、迫害されても耐え忍び、呪われても慰めている」と「アイロニー」を強めて告白する(4:12b)。しかも、11-13節の冒頭と末尾に「今の時に至るまで」「今に至るまで」という同じ語句を置く「包摂」(inclusio)という手法を用いて、現在までも同じ状態にあることを強調する。⁽⁶³⁾ そして、「この世のやっかい者、すべての者のくずのようになっている」(4:12, cf. 4:9)と極めて「アイロニー」に満ちた「直喩」で結ぶ。

このような「自分たちは賢い」と高慢になっているコリントの立場を「反駁」する修辞学的議論を通して見られるのは、「不名誉な称賛」(encomium adoxon)⁽⁶⁴⁾ではなく、既に多くの注解者や研究者が指摘しているように「アイロニー」である。すなわち、「パラドックス」「比較」「比喩」を用いた修辞学的議論を前提にした上で、最後に「アイロニー」⁽⁶⁵⁾を用いるのである。

(7) 結論：「私に倣う者」(4:14-21)

修辞学的議論では「論証」や「反駁」の後に「結論」(epilogos; peroratio)⁽⁶⁶⁾に導かれる。そこでの主な目的は、議論の要約とそれを受け入れさせるための感情への訴えである。修辞学的議論の「結論」は、議論の冒頭、陳述の終わり、主要な論証の直後、議論の結びの4個所に置かれる可能性がある。パウロは既に主要な議論の直後に、「結論」(3:18-23)を述べているが、議論の終わりに改めて「結論」を述べる。パウロは「これらのことを書くのは」という手紙の目的を述べた導入句から「結論」に入る。

第一に、感情への訴えとして、パウロは愛するわが子を論すつもりで手紙を書いたと述べ、それはアポロのような「数多くの教師」としてではなく、共同体の創始者であるたった「一人の父」として、すなわち「学校」のモチーフ(cf. 4:21a)ではなく「家族」のモチーフ(cf. 3:1-2, 4:21b)を用いた「隠喩」によって、「対置」的表現で強調する(4:14-15)。

第二に、議論の要約として、「私に倣う者になりなさい」と要約して勧める(4:16)。パウロは「キリストの心を持つ」(2:16)者であり、また「(キリストに)仕える者」(3:5)であることを幾つかの比喩を用いて語ってきた。また「愚か者になりなさい」(3:18)と勧めた中間的な結論でも「パウロにつく(直訳：パウロのもの)、アポロにつく(直訳：アポロのもの)」(1:12, 3:4)という主張に対して「あなたがたはキリストのもの」(3:23)と結論づけたが、それと同じ内容を置き換えて表現した勧めである。だが、ここではパウロのコリントの共同体の創始者であり、使徒としての権威を回復して、「私に倣う者になりなさい」と勧める。また、それを具体的に実現させ、「キリストにあるパウロの道を思い出させるために」テモテを派遣する(4:17)。尚、この結論は、5-16章で具体論として展開される(11:1, cf. 15:58, 16:13-14)。

第三に、感情への訴えと議論の要約と関係して、パウロのコリント再訪の旅行計画を述べる中で、「言葉」による高ぶりではなく、実践的な「力」を期待し強調する(4:18-20)。そのために「あなたがたは何を求めるか」、学

校の教師のように「鞭」をもって行こうか、それとも親のように「愛」をもって行こうか、と修辭的疑問で二者択一を迫る（4:21）。

2. 神学議論としての「アイロニー」

第1コリント書1-4章の修辭学的分析からパウロが夥しいほどの文彩すなわち修辭的文体（措辞）を駆使して議論していることが明らかである。しかし、リトフィンは、パウロの論敵が修辭学の言葉の巧みさを用いていたことを認めるのではあるが、パウロの宣教方法に関する以下の五つの言明からパウロは修辭学を用いなかったと主張する。すなわち、

- ①「修辭学的技巧（言葉の知恵）によるのではなく」（1:17b）
- ②「優れた言葉や知恵によるのではなく」（2:1）
- ③「説得的な知恵の言葉によるのではなく」（2:4）
- ④「人間の知恵によるのではなく」（2:5）
- ⑤「人間的な知恵の教えによるのではなく」（2:13）

リトフィンは、パウロが隠喩、修辭的疑問、対置などを用いるのは日常のコミュニケーションの範囲であり、⁽⁶⁷⁾ギリシア・ローマの修辭学の実践の明確な特徴を見るまでは、⁽⁶⁸⁾修辭学によって養われたとは言えないと結論する。だが、果たしてそうだろうか。本稿の修辭学的分析では主に文彩表現（措辞）とその背後にある推論方法に絞って「修辭学的技法」を解明してきた。それは日常のコミュニケーションの範囲を明らかに越えており、雄弁家の域に達している。しかし、ここではパウロが議論で何を語るのか、という「発想（構想）」の段階で、修辭学の明確な特徴を指摘して総括したい。

第一コリント書1-4章プロパーの結論は「もしあなたがたの内で誰かがこの世の中の基準で賢いと思うならば、愚かになりなさい。それは賢くなるためである」（3:18）という「パラドックス」に要約される。1-4章で問題であるのはこの結論に表されているように「賢さ」と「愚かさ」の問題である。

パウロはこの問題に対して、第一に、神ご自身が自らを低くして愚かになったと語る（cf. 1:25「神の愚かさ」）。すなわち神は宣教の愚かさを通して人間を救おうと決意された（1:21）と語る。第二に、直接は言及されていないが、「十字架の言葉は愚かである」という言明には、キリストが豊かであったのに貧しくなった（2コリント8:9）のと同様に、キリストご自身も愚かになったことが前提にされている。第三に、パウロ自身も（cf. 2:3「私も」）「キリストのゆえに」自らを低くして（1:31）「愚か」になった（4:10）と語る。その愚かさは「劇場」の「見世物」、「この世の厄介者」「すべ

ての者のくず」に喩えられる（4:9, 13）。第四に、コリント人にも「愚かになれ」と勧めるが、高慢なコリント人に対して「アイロニー」を用いて、自らを低くし相手を高めて非難する。⁽⁶⁹⁾ すなわち、「賢い者はどこにいる、知者はどこにいる、この世の論争好きはどこにいる」（1:20）と一般論で問い、コリントの各論では「人間的に見て賢い者は多くなく、力ある者も多くはなく、よい家柄の者も多くはない」（1:26）と述べる。ところが、これらの議論を前提にした上で、「反駁」では、パウロの立場とコリント人の立場は逆転され、「私たちは愚かだが、あなたがたは賢い。私たちは弱いが、あなたがたは強い。あなたがたは称賛されるが、私たちは軽蔑される」（4:10）と「アイロニー」を用いて語る。「私に倣う者となりなさい」（4:16）と勧める使徒としてのパウロ自身の生き方自体が「アイロニー」に満ちているのである（4:11-13）。すなわち、「十字架の神学」を弁明し、自己称賛に満ちた高慢なコリント人に対して非難する際に、神学議論として「アイロニー」を用いることを「発想（構想）」したのである。「アイロニー」によってこそ、論敵の神学思想に対して、「十字架の神学」の具体的な内容を「対置」できると考えたからである。⁽⁷⁰⁾ だが、このように「高慢さ」（arazoneia）に対して「アイロニー」（eironeia）を「対置」して語るのは、ギリシア・ローマの修辞学の伝統に基づいた手法である。⁽⁷¹⁾

このように修辞的議論の構造である「配列」（*taxis; dispositio*）や文体の修辞法である「文彩表現（措辞）」（*lexis; eloquutio*）ばかりでなく、修辞的議論の「発想（構想）」（*heresis; inventio*）のいずれにおいても、「修辞学の明確な特徴」が見られるのである。それではパウロはなぜ「修辞学的技巧によるのではない」と繰り返し言うのであろうか。第一に、修辞学を用いる人々の中でも、並外れた職業的な「雄弁家」とアマチュアの「能弁家」とに分かれていたが、⁽⁷²⁾ アポロは前者でパウロは後者であるという立場である。⁽⁷³⁾ 第二に、パウロは「修辞学的技巧」を用いないとは言いながらも、パウロはソフィストの論敵を反駁する際に、人間的な「世俗の修辞学」とは明らかに区別された神の「聖なる修辞学」を用いると考える立場である。⁽⁷⁴⁾ もしそうであるならば、「修辞学的技巧によるのではない」という発言にも「アイロニー」が用いられていることになる。⁽⁷⁵⁾ 第三に、演説で最も大切なのは書かれた原稿を「記憶」（*anamnesis; memoria*）⁽⁷⁶⁾ して「実演」（*hypokrisis; pronuntiatio, actio*）することであり、とりわけ「声」や「発声法」が重要な点である後者であった。⁽⁷⁷⁾ パウロは書かれた言葉においては「雄弁家」の域に達しているが、演説の「実演」においては、身体的な弱さとも関連して、「素人」として考える立場である。⁽⁷⁸⁾ 以上の三つが組み合わせられていた

可能性が高い。一言で要約すれば、パウロはユダヤ人に対してはユダヤ人のように、異邦人に対しては異邦人になったと宣教方針を語るが（9:19-23）、修辞学的技巧を駆使する論敵に対しては修辞学を駆使して語るのである。⁽⁷⁹⁾

註

- * 本稿は、2005年9月15-16日に同志社大学で開催された日本新約学会第45回大会で発表した拙稿の第5-6節を第二部として若干書き改めたものである。第一部は『敬和学園大学研究紀要』第15号（2006年）、11-27頁、参照。
- (1) Smit, "What is Paul? What is Apollos?" は本稿と同じ大段落で分ける。それに対して Mitchell, *Paul & the Rhetoric*, は 1:4-9 を「序論」、1:10 を「命題」、1:11-17 を「陳述」、1:18-16:12 を「論証」とし、特に 1:18-4:21 を大段落に分けない。Ben Witherington III, *Conflict and Community in Corinth: Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians*, Grand Rapids: W. B. Eerdmans Pub. Co., 1995, 78-150 は基本的に、Mitchell に従うが、1:1-3、1:4-9、1:10、1:11-17、1:18-31、2:1-16、3:1-23、4:1-21 という大段落に分ける。だが、これは 2:1-5、3:1-4、4:1-5 が、それぞれ前段落の議論と連続性があること、それぞれの前段落の三人称の叙述から一人称単数と二人称複数の対話形式に変えられて一般論から個別的な具体論の展開になっていることを見落としている。
- (2) *Ad Her.*, 1.4.6-7.11; Cicero, *Inv.*, 1.15.20-18.26; *De Or.*, 2.78.315-3.80.325; Quintilian, 4.1.1-79.
- (3) *Ad Her.* 1.4.6-7; Cicero, *Inv.*, 1.15.20, *De Or.*, 2.78.315; Quintilian, 4.1.5. J. Weiss, *Der erste Korintherbrief* 10. Aufl., Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, (9. Aufl. 1910) 1925, 6; W. Schrage *I. Kor.*, Bd. 1, 110 & 115, はこの機能を指摘している。
- (4) 1:5; en pantí... en pantí... pase; logoi kai gnosei; cf. *Ad Alex.*, 27-28; *Ad Her.*, 4.20.27-28; Quintilian, 9.3.76; Lausberg, § 719-732; Anderson, *Glossary*, 90-92.
- (5) 1:5, 7; eploutisthete... hystereisthai; 1:5, 7; pantí... medeni; cf. *Ad Alex.*, 36; *Ad Her.*, 4.15.21; Quintilian, 9.3.81-86; Lausberg, § 787-796; Anderson, *Glossary*, 21-22.
- (6) 1:7, 8, 9; ... tou kyriou Iesou Christou... tou kyriou Iesou Christou... Iesou Christou tou kyriou.
- (7) 「言葉」にはいろいろな意味があるが第1コリント書では「演説」（1:17, 2:1, 4b, 13, 19, 20, 12:8a, b, 14:1）「メッセージ」（1:18, 2:4a, 14:36）「単語」（14:9, 15:2, 54）の意味で用いられている。以下によれば、ここでの「言葉 (logos)」は「演説」を指す。Cf. C. K. Barrett, *The First Epistle to the Corinthians* 2nd ed., London: A & C Black, 1971(1968), 36-37; Schrage, *I Kor.*, Bd1, 115-116. Betz, "Problem," 26-34, はこの背後に「演説」とリベラル・アーツの「知識」を結び合わせて、修辞学 (logos) と哲学 (gnosis) とを融合させたキケロの伝統を見る。
- (8) Conzelmann, *I Kor.*, 70などに反して。
- (9) Betz, "Problem," 38-39に反して、cf. Litfin, *St. Paul's Theology*, 187, n.25. 第1コリント書では、12:8の「知恵の言葉」と「知識の言葉」の対比を除いて、「知識」(

- 1 : 5 , 8 : 1 , 7 , 10 , 11 , 12 : 8) と「知恵」(1 :17, 19, 20, 21, 22, 24, 30, 2 : 1 , 4 , 5 , 6 , 7 , 13, 3 :19, 12 : 8)は、直接的に結びついていない。
- (10) Winter, *Philo and Paul*, 183-185に反して。
- (11) Betz ("Problem," 33-34) は、感謝の祈りの言葉に「言葉(演説)と知識」と対比的なコリント人の問題点である実践的な「業(ergon)」(3 :13-15, 9 : 1 , 15:58, 16:10) が欠けていることを正しく指摘している。
- (12) *Ad Her.*, 1 . 8 . 11- 9 . 16; Cicero, *Inv.*, 1 . 19. 27-21. 30, *De Or.*, 2 . 80. 316-83. 330; Quintilian, 4 . 2 . 1 -132.
- (13) *Ad Her.* 1 . 7 .11-10.16; Cicero, *De Or.*, 2 . 80. 326-81. 330.
- (14) Cicero, *De Or.*, 1 . 31, 138, 141; 2 . 10, 41-42; 2 . 19. 78; 2 . 31. 133- 1 . 34. 147; 3 . 28. 109.
- (15) 1 - 4 章→ 5 -14章, 1 章-3 : 4 → 3 : 5 - 4 章, 1 :18-25→ 1 :26- 2 : 5 , 2 : 6 - 16→ 3 : 1 - 4 .
- (16) この背景にはポリスの政治的理念がある。Cf. Thucydides, 5. 31, to auto legontes; Isocrates, *Archidamus*, 37, autoi te ouketi mian gnomen eckontes; Polybius, 5. 104, legontes hen kai to auto pantes; Welborn, "Discord."
- (17) 1 :10, to auto gegete pantes... me ei en hymin schismata; en toi autoi noi kai en tei autei gnoime; 1 :10, 11, ei en hymin schismata... erides en hymin eis; 1 :13, estaurothe... ebaptisthete.
- (18) 1 :13, Christos... Paulus; 1 :17, baptizein... euaggelizesthai; en sophiai logou... ho stauros tou Christou.
- (19) (1 : 7 , 8 , 9 , ... tou kyriou Iesou Christou)... 1 :10, tou kyriou hemon Iesou Christou; 1 :14-15, ... ebaptisthete... ebaptisa; cf. *Ad Her.*, 4 . 20. 28; Quintilian, 9 . 3 . 77; Lausberg, § § 725-728; Anderson, *Glossary*, 79.
- (20) 1:12, ego men... ego de... ego de... ego de... ; cf. *Ad Her.*, 4. 19; Quintilian, 9. 3. 30-34; Lausberg, § § 629-630; Anderson, *Glossary*, 19.
- (21) 1 :12, lego... legei; 1 :16, ebaptisa... ebaptisa; cf. Quintilian, 9 . 3 . 34, 43; Lausberg, § § 625-627.
- (22) ここでの「キリスト」(ho Christos)は「キリストのからだ」を意味する(12:12)。
- (23) Winter, *Philo & Paul*, 185-187に反して。
- (24) Cf. 2 : 4 , en peithois sophias logois; Plato, *Gorgias*, 453a, peithous demiourlos estin he rhetorike; Cicero, *De Part.*, 23. 79, nihil enium est aliquid eloquentia nisi copiose loquens sapientia; Weiss, 1 .*Kor.*, 22-23; Barrett, *1 Cor.*, 49; Litfin, *St. Paul's Theology*, 44-45, 58-59, 67-74, 95-97, 106-108, 119-120, 187-192; Winter, *Philo and Paul*, 187-188.
- (25) *Ad Her.*, 1 . 10. 18-2. 29. 46; Cicero, *Inv.*, 1 . 24. 34- 1 . 41. 77, *De Or.*, 2 . 81. 331- 2 . 83. 340; Quintilian, 5 . 1 . 1 - 5 . 14. 35.
- (26) Quintilian, 9 . 3 . 44; Lausberg, § § 619-622; Anderson, *Glossary*, 18. この修辞的方法を見落とすと、Litfin, *St. Paul's Theology*, 187-188, Winter, *Philo and Paul*, 187-195のように1:17bから新たな段落が始まると考えてしまう。
- (27) *Ad Her.*, 2 . 4 . 6 - 7 ; Quintilian, 5 . 9 . 9 ; Lausberg, § § 358-365; Anderson, *Glossary*, 108-109.
- (28) *Ad Her.*, 2 . 18. 28; Quintilian, 4 . 4 . 1 - 9 ; Lausberg, § § 1134-1138; Anderson,

Glossary, 63-65.

- (29) 「パラフレーズ」は修辭学の初等教育「プロギュムナスマタ」で、「音読」(anagnosis)「傾聴」(akroasis)など共に基本的な第一段階に位置つけられている。Cf. Theon, *Progymnasmata*, Spengel, 61-64.
- (30) 1 :21, ... en tei sophia tou theou, ... dia tes sophias ton theon, ... dia tes morias tou kerygmatos...
- (31) Lausberg, § 807. 「オキシモロン」は「アイロニー」に極めて近い修辭的表現である。
- (32) Schrage, 1 .Kor. Bd. 1 , 204 & Anm.603は、この小段落をコリント人の「実例」(exemplum) とする。
- (33) *Ad Alex.*, 28; Lausberg, § 732; Anderson, *Glossary*, 91-92.
- (34) Schrage, 1 .Kor. Bd. 1 , 222, は、この小段落をパウロの「実例」(exemplum) と理解する。
- (35) E. g ., Conzelmann, 1 .Kor., 53; Schrage, 1 .Kor., Bd. 1 , 207.
- (36) Cf. nn.43-44.
- (37) Smit, "Epidictic Rhetoric," 190-193, に反して。
- (38) Weiss, 1 .Kor., 52; Bünker, *Briefformular*, 55; Wuellner, "Rhetoric", 185, (1:19-3:21).
- (39) Cicero, *De Or.*, 2 . 80, 312; Quintilian, 4 . 3 . 12; Lausberg, § § 340-342; Anderson, *Glossary*, 85-86.
- (40) 2 : 6 - 7 , sophian de laloumen... sophian de... alla laloumen... sophian... .
- (41) *Ad Her.*, 4. 14. 20; Quintilian, 8. 3. 50-51; Lausberg,; Anderson, *Glossary*, 18.
- (42) *Ad Her.*, 4. 54. 67; Lausberg, § 466; Weiss, 1 .Kor., 62; Barrett, 1 Cor., 74; Schrage, 1 .Kor. Bd.1, 258.
- (43) 2 :13b, pneumatikois pneumatika synkrinontes; 2:14b, ... pneumatikos anakrinetai, 2 :15, ... pneumatikos anakrinei ta panta, ... hyp' oudenos anakrinetai.
- (44) Schrage, 1 .Kor. Bd. 1 , 278-279 は、3 : 1 - 4 を 1 :26-31や 2 : 1 - 5 とは違って、コリント人の「実例」(exemplum) とは考えない。だが、ここも包括的な一般論からコリントの個別的な具体論への展開である。
- (45) Smit, "Epidictic Rhetoric," 193-195に反して。
- (46) Cf. nn.45-49.
- (47) F. H. Colson, "Meteschematista 1 Cor. iv 6," *JTS* 17 (1916), 379-384; B. Fiore, "Covert Allusion' in 1 Corinthians 1 - 4," *CBQ* 47 (1985), 85-102. Cf. nn.50-51.
- (48) *Ad Her.*, 4 . 34; Cicero, *De Or.*, 3 . 39, 157; Quintilian, 8 . 6 . 8 .
- (49) *Ad Her.*, 4 . 19. 26; Lausberg, § 733.
- (50) 分派の問題は、宣教の内容と方法という問題ばかりでなく、献金を受けるか否かという問題ならびに募金活動という経済問題と密接に絡んでいたことは明らかである(1 コリント 9 章, 2 コリント 2 :17, 4 : 2 , 12:13-14, 16)。これはパトロンとクライアントの関係からも解明できる。Cf. J. K. Chow, *Patronage and Power: A Study of Social Networks in Corinth*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1992, cf. Adams & Horrell, *Christianity at Corinth*, 197-206.
- (51) Cf. 3 :10, sophos (architekton), マタイ 7 :24, (andri) phronimo; 3 :10 themelion etheka, ルカ 6 :48, etheka themelion (epi ten petran).
- (52) Quintilian, 9 . 3 . 50; Lausberg, § § 709-711; Barrett, 1 Cor., 88, はこの修辭法を正し

く指摘している。

- (53) 3 :13, hekastou to ergon... hekastou to ergon... ; 3 :14, 15, ei tinos to ergon... ei tinos to ergon...
- (54) 3:13, en pyri... to pyr; 3:15, dia pyros
- (55) Bünker, *Briefformular*, 57も「結論」と見做す。
- (56) *Ad Her.*, 4. 25. 34-35; Quintilian, 9. 3. 54; Lausberg, § § 623-624.
- (57) Quintilian, 8. 3. 72-81; Lausberg, § 558; Anderson, *Glossary*, 38-39.
- (58) Smit, "Epideictic Rhetoric," 195-197.
- (59) *Ad Her.*, 1. 10. 18; 2. 20. 31-29. 46; Cicero, *Inv.*, 1. 42. 78-51. 96, *De Or.*, 2. 81, 331; Quintilian, 5. 5.
- (60) Bünker, *Briefformular*, 57-58, は4:1-13を「反駁」と見做す。
- (61) "metaskematisa" は、実際の「姿を変える」(2 コリント11:13-15、フィリピ3:21) という意味ではなく、「文彩」(schema) を表す修辞学的用語である。Cf. Weiss, *I. Kor.*, 10; Schrage, *I. Kor.*, 334; Winter, *Philo and Paul*, 196-198. ただし、この「比喩」的表現を指しているのは、具体的にパウロとアポロに言及している3:5-4:5であり、1-4章全体ではない。Fiore, "Covert Allusion," に反して。
- (62) Cf. イザヤ58:7; マタイ25:35-36.
- (63) 4 :11-13は「苦難のリスト」(peristaseis)の一つである (2 コリント 4 : 8 - 9 , 6 : 4 - 9 , 11:23-29, 12:10, フィリピ 4 :12, ローマ 8 :35).
- (64) Smit, "Epideictic Rhetoric," 197-201に反して。
- (65) Cf. nn.51-58.
- (66) *Ad Her.*, 2. 30. 47-31. 50; Cicero, *Inv.*, 1. 52. 98-56. 109; Quintilian, 6. 1. 1.
- (67) Litfin, *St. Paul's Theology*, 256.
- (68) Litfin, *St. Paul's Theology*, 262.
- (69) パウロにおける「神」「キリスト」「天使」「人間(使徒・男・女)」という秩序については、3 :21-23、11: 3、7-12他、参照。
- (70) この「神学議論としてのアイロニー」の方法は、「賢さ」と「愚かさ」ではなく「強さ」と「弱さ」に関して、第2 コリント書10-13章、特に11:23-12:10で展開されている。
- (71) Betz, *Die sokratische Tradition*; Forbes, "Comparison, Self-Praise and Irony."
- (72) Cicero, *De Or.*, 1. 21. 94-95, eloquens vs. disertus.
- (73) 2 コリント11: 6 , idiotas toi logoi. Cf. Pogoloff, *Logos and Gnosis*.
- (74) 2 コリント12:19, palai dokeite oti hymin apologoumetha. katenanti tou theou en Christoi laloumen. Cf. Winter, *Philo and Paul* ; G. A. Kennedy, *New Testament Interpretation through Rhetorical Criticism*, Chapel Hill: Univ. of North Carolina Press, 1984, 6, 93.
- (75) ソクラテスは「弁明」の演説の冒頭で、老人になるまで法廷で弁明の演説をしたことがなく修辞学的の技巧にかけては素人であると語るが、その内容は極めて修辞学的である。
- (76) Cicero, *De Or.*, 2. 86. 351-88. 361
- (77) Cicero, *De Or.*, 1. 59. 251; 3. 10. 37-14. 55.
- (78) 2 : 2 , en astheneiai... ; 4 :10 hemeis astheneis. Cf. 2 コリント10:10, ai epistolai men, phesin, bareiai kai ischyrai, he de parousia tou somatos asthenes kai ho logos

exouthenemenoi;ガラテア 4:13, di' asthneia tes sarkos...

- (79) Smit, "What is Paul?"は、パウロが最初にコリントに来た時は、修辞学を用いなかったが、アポロ派に批判されたので、第 1 コリント書では修辞学を用いたと考えるが、第 1 コリント書以外のパウロ書簡でも修辞学を用いているのでこの議論は成り立たない。